特集 渋沢栄一の師・尾高惇忠が盛岡に育んだものは？

近代日本経済の父と呼ばれる渋沢栄一が、盛岡とも深く関わっていたことをご存知でしょうか。明治期における盛岡の事業発展に多大なる影響を与えた人物・尾高惇忠は、渋沢の師であり、生涯に渡るビジネスパートナー。渋沢が願った東北産業振興の思いを受けて、盛岡へとやってきたのです。

尾高惇忠と渋沢栄一の関わり

生涯で約５００の会社に関わり、約６００の社会公共事業に尽力したといわれる渋沢栄一。その功績は、大河ドラマ「青天を衝け」を機に広く知られるようになり、２０２４年には新一万円札の顔になることが決定しています。

そして、渋沢の故郷である埼玉県深谷市で幼少期から勉学を教えたのが、今回紹介する尾高惇忠（あつただ）です。渋沢や尾高の生まれた家は養蚕と藍玉製造や販売を生業とする農家。共に幼い頃から家業を手伝い、渋沢は７歳になると隣村に暮らす従兄弟・尾高惇忠のもとへ論語をはじめとする学問を習いに通ったのでした。尾高は渋沢の10歳上。１８４６（弘化３）年17歳の頃から、１８６８（明治元）年頃まで自宅で塾を開き、学問を教えていました。渋沢は２つ年上の従兄・喜作と一緒に、積雪や風の強い冬も暑い夏も、論語を学ぶために尾高の塾へ通ったといいます。いつしかその道は「論語の道」と呼ばれ、今や尾高の生まれた地域一帯は「論語の里」と呼ばれる観光スポットになっています。

尾高惇忠の肖像写真／盛岡市先人記念館提供

この当時に学んだことは、渋沢の人間形成や思想に大きな影響を与えており、「論語」の精神を教えた尾高の存在が大きいといえます。

盛岡の先人として顕彰される尾高の功績とは？

では、尾高惇忠とはどのような人物であったのか、その足跡を辿ります。盛岡市先人記念館を訪ねると、盛岡市ゆかりの先人１３０人の一人として顕彰されていました。

尾高は、１８３０（文政13）年、渋沢と同郷の埼玉県深谷市に誕生。若き頃は水戸学に傾倒し、尊王攘夷運動に動いたものの討幕計画を断念します。一時は入牢するも、１８７０（明治３）年に渋沢の紹介で富岡製糸場の初代工場長に着任。勇退後も渋沢の関係する民間事業に積極的に参加、東京府ガス局勤務、東京府養育院の専務取締役、養蚕会議局会頭などに就任後、１８７７（明治10）年12月に第一国立銀行（現：みずほ銀行）に入り、同行盛岡支店の支配人として着任します。

第一国立銀行盛岡支店は、公金を取り扱うことが主な目的でしたが、東北地方の殖産興業を図ることも重要な目的としており、尾高はそれま

で培った経験を生かして、盛岡の産業経済発展に尽力したのです。

盛岡市先人記念館館長・松井端巧（まついばた たくみ）さんに、当時の記録に基づく尾高のエピソードを教えていただきました。

「渋沢自身が尾高について語った記述によれば、いろんな紛争を取り持ったり解決したりすることが多く、つまりは相手の話を聞き入れるタイプの人物であったようです。もともと先生をしていたこともあり、強引に自分の意見を推し進めるのではなく、面倒見がよくて人情味ある人柄だったことが窺われます」。

尾高は富岡製糸場の経験と共に、製藍と染色の専門知識があったことから、率先して指導にあたり、事業出資にも加わって会社経営の模範を示しました。また、1878（明治11）年には、旧盛岡藩士が中心となって起こした「第九十国立銀行」の開業にも積極的に協力し、経営指導を行っています。

「自分の経験を生かし、盛岡の地に産業を根付かせようと思いを込めて取り組んでくれた尾高。私たちもその仕事を伝える役目を果たしていきたい」と松井端館長

盛岡商法会議所の立ち上げ

さらに、盛岡における尾高の大きな功績と言えるのが、1881（明治14）年の盛岡商法会議所（盛岡商工会議所の前身）の設立です。東京商法会議所の設立からわずか3年後、盛岡市制施行の8年前のことでした。松井端館長は、「明治維新に際して苦渋を喫した盛岡が奮起し、政治経済共に時勢に遅れてはならないという気負いあふれる証」と話します。当時の新聞に次のような記述が残っていました。

『尾高惇忠なる逸材を草深き南部盛岡の一支店支配人として派したのは当時よりすでに東北の開発振興を国家的見地より念願した第一国立銀行頭取渋沢栄一の配慮と英断と懇望によるところ多かるべく、従って盛岡商工会議所の濫しょう（＝ものごとの始まり）たる盛岡商法会議所は尾高藍香（＝惇忠）を通じ本邦商工会議所の創始者たる渋沢栄一の指導啓発を蒙ったものとも解すべく、以って盛岡商工会議所の起源が如何に由緒正しきものであるかを認識したいのである』

「長きに渡る同志である尾高をこの盛岡に配置したのは、東北開拓と振興に対する大きな期待を込めていたということ。渋沢の考えを実現してくれる尾高への深い信頼あってのこと」と松井端館長は話します。

当時の尾高は商法会議所所長として、盛岡の若手実業家たちに新しい経済理論や実務を学ぶ「実業交話会」も立ち上げました。月1回の例会、会費を積み立てて将来の事業基金にしようとする取り組みは、自ら資金を出し横の連携を生かして事業を運営していく新しい形。現商工会議所のルーツを垣間見るものです。藩と商人という縦のつながりによる旧藩体制の事業が多い中、新時代の経済を学ぶ生きた教育の場となりました。

そのメンバーを見ると、のちの盛岡経済界を担うリーダーが顔を並べており、士族と商人が対等にひざを突き合わせる会であったことも革新的でした。

また、尾高は舟運の利便性を向上するための蒸気船導入を熱く説き、盛岡財界人の賛同を得て、1885（明治18）年に、北上川舟運の近代化にも大きく貢献しました。他にも、数々の場面で寄付を申し出るなど、企業人としての地域貢献は数知れず。仕組みづくりだけでなく、実務指導や経営アドバイスまでトータルに助言を行ったのでした。

知行合一で臨んだ10年

戊辰戦争に敗れたのち、凶作や鉱山の取り上げ、小野組破産など沈滞しきった盛岡経済界にとって、第一国立銀行盛岡支店の開設と共に派遣された尾高惇忠は、良識を得れば直ちに実行に移す「知行合一」の持ち主であり、盛岡に新たな風と活力をもたらしました。

尾高は、1887（明治20）年に盛岡を後にしていますが、わずか10年間で成し遂げた功績は計り知れません。盛岡市先人記念館を訪れた8月、盛岡財界の巨頭と言われる金田一勝定の企画展を開催中でしたが、彼もまた「交話会」メンバーのひとりです。温故知新の心で先人の思いを振り返ることは、今につづく盛岡を形作る鍵を再発見すること。尾高の活動や軌跡を探ることで、明治期を生きた盛岡経済人の新時代に立ち向かう意欲をうかがい知ることができます。厳しい経営を求められる今、地域に根ざす事業一つひとつをどう未来へつなげていくか、改めて考えるきっかけになるのではないでしょうか。

盛岡市先人記念館2階の企画展示コーナー。
盛岡を形づくった数々の人物やその功績等を紹介しています